



UEDA
Women's Junior College

上田女子短期大学附属図書館報

みすず

No.40
2013.12

40号発刊に寄せて—— 図書館を一層身近なものに、そして図書館から外の世界を見よう

学長 小池 明

今号が図書館報の創刊第40号になる。上田女子短期大学が今年創立40周年を迎えたその歩みと軌を一にしている。図書館は大学の心臓と例えられる程に大学の施設・機能として最重要の一つ、蓋し学生、教職員に対して大きな知の貢献をしてきたことになる。

40号の巻頭を書くに当たり、これまでの39号全てをレビューしてみた。昭和49年12月創刊以来、第19号までは「図書館だより」の名で発行され、創刊20号を記念して「みすず」に改称された。その間、昭和54年に図書館自体が校舎本館の中にあつた小規模のものから現在の位置に新築され、平成の初めには所謂コンピュータ化への移行もなされた。併行して他大学始め、他の図書館とのオンライン化にも取り組み、云はば学外に打って出る一方、改築と設備整備も逐次行つたなど、ハード、ソフト両面に亘り充実を図り、現在がある。発足時には10,602冊の蔵書数であつたものが、今や73,000冊を数えるようになった。

短大創立後、草創期に当たる頃は教職員、学生とも学園の歴史は自ら作つて行くのだという熱意に溢れていた、その心意気が図書館だよりも見られる。施設はいまだ満足のものではなかつたにせよ、学ぶこと、教えることに意気込みが感じられ、それはこの図書館だよりも読み手に熱く訴える。学生の寄稿からも知的好奇心は言うに及ばず、エッセイに込められた知的水準の高さも伝わってくる。

今、この40年を踏まえて次の10年、20年、延いては次の50年の為に、本学の図書館は如何に在るべきかを考えていかねばならない。

図書館の機能自体も往時の本の貸し出し主体から大きく変化している。技術進歩は著しく、ネットワークの広がりや全国の図書館が結ばれるなど物理的な制約が解消される一方、地域の史料の保存などアーカイブ施設としての役割は益々重く、今後の展望は単に書物、印刷物などが電子化されることへの対応だけでは済まない。特に、地域と共に生きる短大の使命を考えると、大都市の図書館とは異なつた特色を出していく必要がある。卒業生との関わりのみならず、地域コミュニティ、学外の人々との交流にも大胆に取り組んでいくこともミッションである。学内サービスに留まらず、地域のニーズをくみ上げ、同時に学生の勉学の充実、教職員の研究の向上にどう関わっていくのか、従来以上に利用者への貢献となるべきソフト面を本学自身の知恵で改良、充実していかなければならない。図書館を核にラーニングコモンズ、知的交流のフォーラムを作り上げ、充実させつつ地域とともに生きる高等教育機関としての責務を果たすことが、本学自身に対する良いフィードバックを生む。

この10月に本学は地域連携センターを発足させた。センター自体、これからノウハウを蓄積していかなければならないが、図書館始め本学の持つソフト、ハードの機能を生かし、良い相乗効果が生まれることを期待したい。

人類の長い歴史を振り返ると、ハードコピーとしての書籍の生命はまだまだ朽ち果てることはないと確信する。所謂、本の虫、或いは本の匂いをかきながら、などという本との関わりを表す言葉には何と云つても郷愁を感じる。ゆくゆくは地域発展への一層の貢献、特に生涯学習の担い手であることなど高等教育機関としての負託にも応えつつ、例えば地域の人々、学生、教職員が混じり合つて江戸時代のような会読の場を再生することができればなどと思う。乗り越えるべきハードルは多く、又、高いが図書館の新しい機能、使命を果たすために着実に進化していきたいと切に願う。

Ueda Women's Junior College Library News Misuzu

目次

40号発刊に寄せて— 図書館を一層身近なものに、そして図書館から外の世界を見よう	学長	小池 明	1
生き延びるための読書	幼児教育学科	教授 長田 真紀	2
古典研究とデータベース—附属図書館のツールに触れながら—	総合文化学科	教授 西山 秀人	3
Library of the Year 大賞	非常勤講師	宮下 明彦	4
本学教員の新刊著作			4
「開館中」	幼児教育学科	1年 森尻香菜子	5
私にとっての図書館	幼児教育学科	2年 諸橋 佳奈	5
司書課程に学ぶ	総合文化学科	1年 竹重まゆ子	6
私と図書館	総合文化学科	2年 井上 理歩	6
図書館ガイド			7
図書館ニュース 第14回七夕文学賞			8

CONTENTS

学長	小池 明	1
教授	長田 真紀	2
教授	西山 秀人	3
非常勤講師	宮下 明彦	4
		4
1年	森尻香菜子	5
2年	諸橋 佳奈	5
1年	竹重まゆ子	6
2年	井上 理歩	6
		7
		8

生き延びるための読書

幼児教育学科 教授 長田 真紀

『私のモスクワ、心の記憶』という珠玉の随筆がある。著者のニーナ・アナーリナ(1945～)は、世阿弥の『風姿花伝』をロシア語に訳した日本演劇の研究者である。本書でアナーリナは、敬愛する日本文学と日本人について語るとともに、自身にとっての国文学であるロシア文学への尽きせぬ思いを綴っている。

ロシアはいつの時代も常に政治的・経済的混迷のさなかにある。いつもだ。とりわけ、ソビエトが崩壊しその混乱が極まった時、多くの人が自己を見失い、果ては自殺者が続出した。しかし、少なからぬ良識ある知識人たちは、本物の文学を読み続け、かつ読み深めることで生き延びた。アナーリナもそのひとりである。

1971年11月、全30巻のアカデミー版ドストエフスキー全集の予約受付が開始されると、モスクワの街の各書店にはすぐさま1000メートルを越える長蛇の行列ができた。アナーリナは6人でグループを組み、交替で並ぶこと一昼夜、漸く書店で予約カードを受け取った。その間、並んでいる誰もだが、うきうきとした高揚感に包まれた。第1巻は1972年の初めに刊行。収録された『貧しき人々』は、もちろんそれ以前にも出版されており、皆がすでに読んでいた作品である。けれど、「モスクワ中の知識人は一人残らず、敬虔な祈りを捧げるかのようにこの巻を読んだ。」最終巻が出たのは1988年。社会は、ブレジネフからアンドロポフ、チェルネンコを経て、ゴルバチョフの時代に変っていた。アナーリナはその歳月をドストエフスキーからの「洗礼」を受けながら生きてきたことによって、「世界観が鍛えられ」、その後「方向を見失わずにいることができた」という。

アナーリナの気質、ものの見方は、父親が強制収容所に入れられていたこととも無縁ではない。「父は何ものも恐れない、どんな「体制」も信じない人間になった。父は自分の内面からの呼びかけに敏感に耳を澄ませ、自分の頭脳と意志だけを頼りに生きた。そして不屈な魂の内側に、この上なく柔和で詩情あふれる心を秘めていた。」さらにアナーリナは、日本人と父親についてこう語る。「自然を静かに観照する日本人の比類ない才能が、何よりも私の心を揺さぶった。日本人ほど自然の生命に身をゆだね、その神秘

の息づかいと一体になれる民族は世界にいない。日本人の自然への接し方には、私の父と深く共通するものがあった。」この父親は、熟練工として働きながら、特異な園芸家として果樹園の仕事に没頭した。そして膨大な園芸関係の蔵書、殊に農学者ミチューリンの選集を丹念に繙いていた。

日本の社会を覆っている空気はもう長いこと重い。いつも足の踝まで冷たい水にひたひたと浸かっているような気味悪さが続いている。いつのまにか、どこか身体の奥が蝕まれているような気さえる。停滞した社会状況のなかで将来の希望を失い、目先の情報に翻弄されながら、結局、大きな時代の波を乗り越えることができない危惧もある。もしこれから激動の時代と社会とが訪れるとすれば、そこを生き延びるためには、各々が切実な、本当の読書体験というべきものを蓄積していくことが、頼るべき杖になるのではなかろうか。

日本は世界的に見てまだまだ本の国、文学の国だ。貴重な財産ともいうべきその資質を、今後自ら手放すようなことがあってはならない。

※『私のモスクワ、心の記憶』

(ニーナ・アナーリナ著 正村和子訳 群像社 2005年2月)



古典研究とデータベース

—附属図書館のツールに触れながら—

総合文化学科 教授 西山 秀人

平成25年4月に本学は創立40周年を迎えた。本稿を草するにあたって、本学の歩みを改めて振り返って見たところ、奇しくも今年は総合文化学科の母体である国文科開設から30年を数えることに気づいた。さらに私事ではあるが、私が国文科の教員として奉職してから、丸20年になる。赴任当初はまだ20代であったことを思うと、感無量である。

新任の頃は時間に余裕があったので、毎日のように図書館に通い詰め、講義の準備と研究資料の収集に勤しんだ。当時の図書館は今よりもずっと狭く、二層式の書庫も演習室もなかったが、PCは数台設置されており、全蔵書の検索が可能であった。本学に赴任するまでの約10年間、旧態依然とした大学図書館を使ってきた私にとって、本学の検索システム(その頃はOPACという名前すら知らなかった)はとても画期的に見えた。

蔵書検索ができるのだから、文学作品の本文だってPC上で検索ができるはず、そのうちPCが研究上必須のツールとなるに違いない、当時は漠然とそんなことを考えていた。

平成7年、岩波書店が『新日本古典文学大系』の本文・脚注などのデータを収めた『CD-ROM版 八代集』を刊行した。身近なところで『百人一首』の歌を例にとると、持統天皇の「春すぎて 夏きにけらし 白妙のころもほすてふ あまのかぐ山」(2番歌)の歌は『新古今集』にも採られているが(巻三・夏・175番歌)、この歌の口語訳などを確認したい場合は、歌集・歌番号を指定すれば、通釈はもとより語釈・作者略伝などの情報も閲覧できる。もちろん、句検索も可能だし、検索結果をコピーしてWord等に貼り付けることも簡単だ。当時の販売価格は52,000円。さっそく図書館で購入してもらった。

翌8年には、角川書店が『新編国歌大観CD-ROM版』を刊行した。これまで紙媒体で刊行されていた『新編国歌大観』全10巻の本文をデータベース化したもので、古代から近世に至るまでの和歌約45万首を検索できるという優れ物だ。たとえば、先の百人一首歌の初句「はるすぎて」という句表現を検索してみると、159首もの用例が瞬時に検出される。その中には百人一首歌の出典となる、『万葉集』巻一の「はるすぎて

なつきたるらし しろたへの ころもほしたり あめのかぐやま」(28番歌・持統天皇)も当然含まれている。検索された和歌本文は画面に一覧表示されるので、本文の比較も容易である。

ただ、CD-ROM 1枚で約28万円というのは常識を超えた価格であり、さすがに個人では購入しづらい。これもお願いして図書館で買ってもらった。

当時は演習の授業で歌集を扱うことが多かったので、学生には上述の『八代集』と『新編国歌大観』のCDを活用した調査を課していた。おそらく図書館所蔵のCDデータベースの中でも、一番学生に利用されたCDではなかろうか。

このように、CD(もしくはDVD)データベースが基本ツールとして定着したことで、研究環境は大きく変化し、CDを所持していないと研究が進まないという状況にまで至った。しかし、CDを使うたびにPCにセットしなければならないというのは煩わしいし、OSをバージョンアップすると、プログラムが起動しなくなるなどの問題もあった。

そうした諸問題を解決してくれたのが、オンラインデータベースである。Web上で遠隔操作を行うので、当然CDなどのメディアは不要。ネットにさえ接続できれば、どこからでもアクセスできる。現在、私が最も活用しているのは、百科事典や辞書・事典を中心に構築された総合データベース「ジャパンナレッジプラス」だ。『日本国語大辞典』や『新編日本古典文学全集』全巻の本文がWeb上で検索・閲覧できてしまうのは大変ありがたい。図書館や教員研究室のPCで利用できる。

「古典文学を読む」の受講生をはじめ、卒業研究で文学を専攻している、あるいは専攻しようと思っている学生は、興味本位でも構わないので、まずはこうしたツールを使ってほしいと思う。ただし、データベースはあくまでも検索のための一手段に過ぎない。最終的には「本」に回帰することを忘れないでほしい。



Library of the Year大賞

長野県図書館協会事務局長 宮下 明彦
本学 非常勤講師

Library of the Year大賞という図書館界のコンクールグランプリ賞がある。2013年度この大賞に伊那市立図書館が輝いた。2011年度は小布施町立図書館・まちとしょテラソだったから、県内の図書館が立て続けにこのグランプリ賞を受賞したことになる。

長野県はそんなに図書館先進県なのか、そうとも言えるし、そうでないとも言える。伊那や小布施のような全国のトップに立つ図書館もあれば、無料貸本屋、お役所図書館、30年間時間が止まったような図書館もある。

それらの中で、頑張っている図書館を中心に、この度『明日をひらく図書館－長野の実践と挑戦』(青弓社)を発行しました。

これからの図書館像は、一つには読書を中心とした文化教養型図書館、この県下の代表が軽井沢町立図書館と言えるだろう。二つには課題解決支援型図書館で、長崎市立図書館のがん情報サービスが全国的に注目されている。県内でその方向を標榜しているのが上田情報ライブラリーであり、飯田市立中央図書館、えんぱーく・塩尻市立図書館もそうだ。三つ目は図書館(ヤカタ)に囚われないで、館外でも活動を行う伊那市立

図書館に代表される。それは”伊那谷の屋根のない博物館”の”屋根のある広場”へ、高遠ちずぶらり、「知る」のエンパワーメントは「地域」から等の言葉に表現されている。そして、小布施まちとしょテラソは「まちじゅう図書館」、一箱古本市を展開しこの先駆をなしている。

そして、四つには長野県図書館協会が県下の図書館と協働して推進している「長野県地域史資料データベース構築・公開事業」だ。これは図書館の書庫に眠っている地域史資料の宝の山を、誰でも読めて、利用できる形にして市民に還元するデジタルアーカイブ事業で、図書館本来の役割、機能といえるだろう。

県下の公共図書館や学校図書館関係者20数名が執筆し、今夏に発行した『明日をひらく図書館』をご覧ください。これら図書館の将来像が見えてくる。関心のある方はご一読を。

2013年 本学教員の最新刊著作 (今年発行の単独書・共著・分担執筆) 著者の五十音順

- *大橋敦夫先生 『長野県方言辞典 特別版』馬瀬良雄【編集代表】
信濃毎日新聞社 2013年10月発行 ISBN:9784784072194(分担執筆)
『魅せる方言：地域語の底力』大橋敦夫【ほか著】
三省堂 2013年11月発行 ISBN:9784385365268(共著)
- *長田真紀先生 『幼稚園と小学校の教育－初等教育の原理－改訂版』
乙訓稔【編著】東信堂 2013年3月発行 ISBN:9784798901701(分担執筆)
- *西山秀人先生 『和歌文学大辞典』古典ライブラリー
2013年4月より<日本文学web図書館>にて配信 運営：(株)古典ライブラリー(分担執筆)
『絵巻で楽しむ源氏物語 五十四帖』57浮舟②
朝日新聞出版 2013年2月発行(分担執筆)
- *宮下明彦先生 『明日をひらく図書館－長野の実践と挑戦』
宮下明彦・牛山圭吾【編著】青弓社 2013年6月発行 ISBN:9784787200518



「開館中」

幼児教育学科 1年 森尻 香菜子



私にとって本とは、心の支えです。こんなにも人の心を豊かにし、知識の大倉庫のようなものはありますか。心が暗くなり、落ち込んでいる時には本を読んで、前向きになれることもあります。心が浮ついて落ち着かない時、本を読むことが自分の居場所だと思える時があります。そして本を読むことは、自分の知らない物事や、人々が今までのことを書きつづった歴史を自分の新しい知識として吸収することが出来ます。

しかし読書の記憶というのは、儂いものです。一度読んで吸収したものは、すぐに忘れてしまうことがあります。その記憶をよみがえらせるために、私たちはまた図書館へと足を運びます。

上田女子短期大学の図書館には、たくさん本があります。短大に入学したばかりの春は、図書館に入りにくさを感じていました。徐々に学校生活にもだいに慣れ、図書館に頻繁に出入りするようになりました。夏になると、図書館の前の渡り廊下を通るのが楽しみでした。蝉の鳴き声と附属幼稚園の子どもたちの声が聞こえてくるのが、私に夏を感じさせました。そして、なにより素敵なことは、親切でいつでも力になっ

てくださる先生方がいらっしゃいます。図書館の「開館中」の文字が目に入ると、私の進行方向は図書館に一直線。階段を上ると、先生方が優しい笑顔で「こんにちは」と挨拶をしてくれます。同時に私の頭の中は本を借りる楽しみでいっぱいになります。


それではここで、普段どんな時に図書館を利用するのかをいくつか紹介させて頂きたいと思います。まず、自分が借りたい本を借りたい時に自由に借りることが出来ます。基本的に貸し出し期限は2週間なので、あっという間に過ぎる2週間で、どれだけ本を満喫できるかがポイントということですね。本を借りたり、返したりする際には本に付いているバーコードを機械が読み取り、簡単に出来てしまいます。又、図書館内にあるパソコンで本の種類や置いてある場所も検索することが出来ます。便利な設備に感謝の気持ちが湧いてくる瞬間です。他にもレポート作成やテスト勉強等も出来ます。

図書館は、私たち学生の夢と希望がたくさん詰まっています。本は、私たちを成長させ、未来を大きくしてくれるものだと思います。



私にとっての図書館

幼児教育学科 2年 諸橋 佳奈



私は、ほぼ毎日図書館を利用しています。

大学へ入学するまでの小学校、中学校、高校では本や図書館にあまり親しみがなく自主的に図書館を利用したことがありませんでしたが、大学の図書館には様々な本があり、保育者を目指す上でも、人として成長するためにも、多くのヒントを得ることが出来ます。現在では毎日のように利用をしている図書館ですが、入学をする前から幼児教育に関する専門的な本が沢山あるのではないかと思います、とても心を踊らせていました。いざ大学に入学すると授業ばかりで中々図書館へ行く時間を作ることが出来ませんでした。その中でも私は、空き時間を利用して図書館を利用しています。

図書館では調べ物はもちろんですが友人と少し離れ、静かな環境の中で自分と向き合い自分を高めていくことのできるとても良い場所だと思います。友人と会話などをして空いている時間を過ごすことも好きですが、図書館を利用し課題に取り組んだり、調べ物をしたりすることでより有意義な時間を過ごすことが出来ると思います。好奇心が旺盛な私は、パソコンや携

帯電話などでもよく調べ物をしますが、図書館へ行き実際に本を手にとって調べ、学んでいく方が記憶に残りやすいと感じています。

私は、図書館の出入口に飾られている「苦しいことから逃げていると楽しいことから遠ざかる」というシェークスピアの詩にいつも心を打たれます。ついつい面倒なことは後回しにしてしまっていますが、図書館に入る度に気持ちを改めることができます。

私にとって図書館は、学校生活の中で、とても有意義な時間を過ごすことのできる場所だと思います。短大での2年間は忙しく、時間が過ぎるのはとても早いです。より充実した学校生活を送るために、残り少ない学校生活の中でも図書館を利用していきたいと思えます。

司書課程に学ぶ

総合文化学科1年 竹重 まゆ子

私は、小学生の頃から本を読むことが好きでした。そのため、たくさんの本が借りて読める図書館が大好きでした。借りていた本もミステリーにファンタジーや伝記、エッセイ、図鑑、絵本など特定のジャンルを借りるのではなく、興味が持てれば、どんな本でもすぐに借りて、貪るように読んでいました。ミステリーを読んで頭を悩ませたり、ファンタジーを読んでワクワクしたり、図鑑を借りて、知らなかったことを知ったり、エッセイを読んで楽しんだりしていました。

毎日図書館に通っていたので、司書の先生との交流も自然と増え、時々図書館の仕事を手伝うこともありました。返却された本を棚に戻す作業の補佐や貸し出しなど、簡単な手伝いでしたが、やりがいや楽しさを覚えました。やがて委員会に入ることができる年齢になると図書委員会に入り、ますます図書館に関わっていきました。

そして、本を借りる側から、貸す側の司書に楽しさをますます感じていきました。「憧れの仕事は何ですか」「なりたい職業は何ですか」と聞かれると漠然と「司書かな」と考えるようになっていきました。漠然と憧

れてはいましたが、どのようにして司書になるかなどは、当時全く考えていませんでした。

私がやっと司書について真面目に考えるようになったのは高校生活も半ばを過ぎた頃の進路調査でした。進学先を決めるため、将来就きたい職業を聞かれ、そこで初めて自分の将来について深く考えることになりました。それまでただ何となく憧れだった司書という仕事を現実に自分の将来の仕事として意識し始めました。しかし司書になるためにはどのような資格を取ればよいかなど、分からないことばかりでした。その時、頼ったのはやはり図書館でした。司書になりたいなら、直接司書の先生に聞けばよいと考えたからです。

そして今、上田女子短期大学に入学し司書課程を選び学んでいます。実際に司書について学んでみると、思っていたよりも多くのことを学ばなくてはならなくて驚きました。それでも、その学ぶべき内容は司書として必要な技能だと思えますし、実際に司書になったとき利用者の方々のために役に立つ事でしょう。これからもさらに多くのことを学んでいきたいと思えます。

私と図書館

総合文化学科2年 井上 理歩

私が幼稚園へ通っていた頃、親に連れられて、近くの市立図書館へよく行っていた。また、幼稚園へ通う年代であったということもあり、読んでいたのは絵本ばかりではあったが、当時の私は、絵本が紡ぎ出す物語の面白さに魅入られていたと思う。そのせいか、小学校へ行くようになった際も、市立図書館へ行き続けたうえ、学校図書館の絵本はほとんど読み尽くしたほどだ。そして、中学年にもなると、子供向けの小説を読むようになった。絵本から小説へ、読書の幅が広がった時期である。

だが、それと同時に、家の都合で市立図書館へ行くことが難しくなり、利用する頻度が段々と少なくなっていた。その時には、利用頻度が少ないことに対して、「学校の図書館があるから別にいい」と深く気にしないでいたが、あれから十年近く経ち、大学で図書館司書の課程を学んでいる今、その考えは誤りであると感じている。

図書館によって、中心に扱っている図書は異なっている。大学の附属図書館であれば、教授や学生が研究するための専門書が多いというように。そのため、自

身が探している図書が、ある図書館では所蔵していないが、別の図書館で扱っているという例があると思う。今は、長野県上田市でいう「エコー」のように、地域の図書館と連携することによって、他の図書館から図書を借りることができるが、そのような仕組みが無かったとしたら、当時の私のようにそのような仕組みを知らなかったとしたら、正に「学校の図書館があるから別にいい」という状態になってしまう。図書館ごとに扱っている本に差異はあるし、図書館という建物の構造やイベントにしても、違いはある。一つの図書館には、他の図書館には無い個性があると思う。

改めて振り返れば、当時の私が行くことが難しくても市立図書館へ行き続けていれば、私の読書歴はより深いものになっていたかもしれない。それでも、今、図書館司書課程を学んでいくことによって、「図書館の個性」に気が付くことができ良かった。将来、司書として働くことができたとしたら、次の世代の若者たちにそれを伝えていきたいと思う。

図書館ガイド

◆ 図書館の今昔 ◆ ～ 40年のあゆみ～

開学当時(①)、図書室は、現在の20番教室にあり
ました。(②～④)

昭和55(1980)年に、現在の附属図書館が独立棟
として完成。増改築を経て1998年に現在の姿に
なりました。(⑥)

1987年から、館内資料のデータベースを県内の短
大に先駆けて構築、1990年から本格稼動。(⑤)

館内業務の技術革新をつねに心がけ、利便性の向
上に努めています。



①開学当時の本館校舎(1973年)



②閲覧風景(1974年、旧図書室、現20番教室)



③旧図書室にて、当時は全国的にも珍しかった短大での
卒業研究指導(写真中央:須永淑先生/左背景は21番教室)



④図書室内での授業(写真中央:天田邦子先生)



⑤コンピュータシステムによる貸し出し開始(1990年)



⑥現在の附属図書館



⑦現在の本館校舎

図書館 ニュース



第14回 七夕文学賞

◆恒例となりました七夕文学賞も、
本年は左記のみなさんの作品が受賞となりました。

優秀賞

自由詩

幼児教育学科 二年 池田 承子

虫

暑くなるよさまざまな虫が出てくる
ミーン ミーン ミーン
チンチロ チンチロ チンチロリン
外の世界にはさまざまな大きな虫がいる
小さい虫 中ぐらいの虫 大きな虫
暑くなるよさまざまな虫が出てくる
ミーン ミーン ミーン
チンチロ チンチロ チンチロリン
私たちの他にも外で生きている命がある

佳作

自由詩

幼児教育学科 一年 樋口 真梨子

夏祭り

空に浮かんだ
入道雲ひとつ
じっと眺めていたら
ふと聞こえてきた
祭囃子の音
日が沈む前に
あの子のことを
誘ってみようかな

佳作

自由詩

幼児教育学科 二年 齋藤 美都

夏

子ども頃 沢山遊び
楽しみだったあの夏
今はもう遠い昔のような
まるで昨日のような
不思議な気持ちになる
夏のかおりが強くなり
あの日の思い出が浮かぶ

佳作

俳句

総合文化学科 二年 中野 茉依

静寂に包まれ咲きゆく水中花

※選考・添削は、大橋敦夫図書館長

編集後記

a postscript by the editor

図書館からの発信

実りの秋。本学の教職員による外部での研究発表が相次ぎました。①木内公一郎先生「図書館を拠点とした教員との協働による学習支援に関する研究」(私立短期大学図書館情報担当研修会) ②司書・須田智里さん「図書館と図書館サークルFLC:学生との協働」(長野県図書館大会)。また、学生有志も、年度頭初からの活動を継続してくれています。「図書館員とそのたまごたちによるおはなし会」(上田情報ライブラリー)。

なお、本学のリポジトリが、よくできているとことで『国立情報学研究所の概要』で紹介されています。

大橋敦夫

みすず

第40号

上田女子短期大学附属図書館報
2013.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館紀要委員会
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel : 0268-38-6019 Fax : 0268-38-6019
E-mail : lib@uedawjc.ac.jp